

第二項 機雷敷設船艇

第一、敷設艦

三十七、八年戰役以前ニ在リテハ機雷敷設ハ有線水雷ト同ジク概ネ一般小中型敷設艦ニテ敷設セラレツツアリシガ彼自働繫維器ノ完成ハ自然的ニ之ガ用法上ニ躍進ヲ促ガシ大量迅速敷設ニ適スル艦艇ノ出現ヲ要望スルニ至レリ乃チ明治三十六年夏季實驗調査委員ヲ設ケ第一期實驗トシテ横須賀造兵部海岸ニ機雷落下設備ヲ爲シ機雷ノ鐵路滑走働作、水雷罐内状態、繫維器状態等試験ノ結果良好ナリシカバ第二期實驗即チ航走實驗ヲ必要トシ軍艦扶桑ヲ用ヒ同年中下旬館山灣ニテ實驗セリ當時ノ敷設裝置ハ架空式(「ハンギング、レール」)ニシテ軌條端末落下傾斜部ハ橋上ヨリ鋼索ヲ以テ支持セル程度ノ應急的設備ナリシガ差當リ使用ニ適スルヲ知り茲ニ同年十二月ヲ以テ海軍々令部長ハ海軍大臣ニ商議スルニ軍艦浪速又ハ高千穂ニ電氣機械水雷落下裝置至急取附ケラレ度件ヲ以テスルニ至レリ

三十七、八年戰役中我海軍ノ使用セル臨時敷設艦ハ軍艦高千穂及和泉ノ二隻ニシテ各一回二十四個ノ敷設能力ヲ有シ他ハ全部假裝砲艦假裝巡洋艦ヲ使用シ何レモ架空軌道(懸吊式)ニ依レリ

(備考)同戰役中驅逐隊艇艦ニテ浦鹽港外ニ各艦(艇)二個宛ノ機雷ヲ亦旅順港外ニ幾十回ニ亘レル艦載水雷艇ニ依ル機雷敷設行動アリシモ何レモ臨時假設的施設ニ過ギズ敷設艦艇トシテ舉グルニ足ラザル程度ナリ

右戦役後明治四十二年十月海軍々令部長ハ海軍大臣宛商議スルニ浪速、高千穂ノ兩艦ヲ甲種機械水雷敷設艦ニ改造方(前顯高千穂ノ施設ハ臨機假設セルモノナリ)ヲ商議セリ全文左ノ如シ

明治四十二年十月二十五日

海軍々令部長 伯爵 東郷 平八郎

海軍 大臣 男爵 齋藤 實殿

浪速高千穂兩艦ヲ甲種機械水雷敷設艦ニ改造ノ件

甲種機械水雷敷設艦ハ三十七、八年戦役ヲ通ジテ幾度カ偉功ヲ樹テタル實例アリシト爾後海外諸強國ニ於テハ之ニ鑑ミテ何レモ此ノ目的ニ對シテ特別ノ艦裝ヲ施セル軍艦ヲ有スルニ至リタルニ關セズ我海軍ニ於テハ未ダ之ニ及バズシテ今尙出師準備上必要ノ際商船ヲ徵備艦裝シテ之ニ充當スル計畫ナルモ機械水雷敷設艦ノ艦裝及其ノ他ノ準備ハ多大ノ時日ヲ要シ咄嗟ノ間ニ急速竣成セシムルコトハ實際上頗ル困難ニシテ開戦ノ最初ニ於テ其ノ要大ナルヲ期スベキ此ノ種艦船ノ準備トシテハ極メテ不利ノ状態ニアルモノナリ加フルニ該水雷敷設事業ハ平時ヨリ相當ノ訓練研究ヲ積ミ居ルニアラザレバ實施ニ當リ完全ニ其ノ機能ヲ發揮セシムルコト能ハザルノ恐アリ是諸外國ニ於テモ平時ヨリ水雷敷設艦ヲ置キ演習等ニ從事セシムル所以ナリ故ニ我海軍ニ於テモ他列強ノ如ク此ノ種特種艦ヲ居常準備シオキ一旦有事ノ日直ニ機先ヲ制スルノ準備ヲ整ヘ置クハ目下ノ急務ナリトス依テ最僅少ノ經費ヲ以テ此ノ要求ヲ充タス爲近キ將來ニ於テ海戰部隊ニ伍セシメ難キ老齡ノ艦船中ニ就テ最適當ナル浪速高千穂ヲ採リ此ノ際機械水雷敷設艦タルニ必要ナル艦裝ヲ施スヲ適當ナリト認ム就テハ別紙改造方案ニ依リ相當ノ手續ヲ講ジ改造方取計相成度

右商議ス

浪速 高千穂 改造 方案

一、艦首砲ノ外現在ノ備砲ノ全部ヲ撤去ス

二、後艦橋ヲ撤去ス

三、水雷發射管ヲ撤去ス

四、現在ノ前艦橋ヨリ後艦橋迄ノ間ニ「アルワータ」ヲ設ケ其ノ「トツプサイド」ニ輕甲板ヲ張ル

五、前記上甲板構造物ノ内ニ甲種機雷二百個以上ノ敷設ニ要スル諸工事ヲ施ス

六、三吋砲十二乃至八門ヲ上甲板以上ニ備フ

七、探照燈(九〇纏)四個ヲ裝備シ得ル様必要ナル改良ヲ施ス

斯クテ先ヅ四十四年軍艦高千穂ノ改造ニ着手セシガ充分ナル訓練實驗ヲ經ズシテ日獨戰爭ニ入り青島港外ニ之ヲ殞失シ尙先ニ同ジク改造ノ豫定ナリシ軍艦浪速ヲ北海ニ遺棄スルニ至リシカバ茲ニ更ニ大正四年軍艦津輕ヲ機雷敷設用ニ改装セリ

次テ翌大正五年ニハ敷設艦勝力ノ建造トナリ殆ド亦之ト相前後シテ軍艦阿蘇ヲ改装シ敷設艦タラシメタルヲ以テ大正六年ニハ純然タル敷設艦三隻ヲ算スルニ至リ一時我海軍ニ於ケル敷設艦全盛期タルノ觀ヲ呈セリ然ルニ老朽艦ノ常例トシテ津輕ハ先ヅ大正十一年廢艦トナリ阿蘇亦餘命幾千モ無キ狀勢ニ陥リシヲ以テ大正十一年ヨリ翌十二年初頭ニ互リ之等ノ代艦トシテ軍艦常磐ヲ敷設艦ニ改装シ其ノ任務ヲ繼承セシメシガ昭和四年更ニ敷設艦嚴島及白鷹ノ竣工ヲ加ヘ同年末ニ於テハ常磐勝力ト共ニ純敷設艦四隻ヲ數フルニ至レリ

之等諸艦ノ兵裝艤裝ノ大要ハ別冊參考圖表ニ示スガ如クナルヲ以テ各艦個々ノ説述ハ之ヲ省略シニ、三代表的敷設艦ニ就キ其ノ改善進歩ノ一端ヲ示サントス

一、常 磐 (大正十二年三月)
(改装 竣工)

一、自大正十一年六月施工
至同 十一月施工

(一) 敷設装置

(1) 上甲板兩側ニ首尾線ニ並行シ機雷用軌道ヲ設ク

(2) 機雷敷設原動機ニ臺新設ス

(3) 發電機ニ臺及落下用電動機ニ臺新設

右附隨作業トシテ後部砲塔撤去、士官室改造、水雷防禦網附屬物撤去、艦長室、副長室、航海長室改造等ヲ行フ

(二) 機雷格納能力及同装置設備

(1) 前後部水中發射管ヲ撤去シ機雷庫ニ改造ス

(2) 彈藥庫四個所及魚雷頭部庫二個所ヲ機雷炸藥庫ニ改造ス

(3) 中甲板中央十五糎砲ヲ撤去シ右舷側機雷裝備室、機雷引揚装置、機雷昇降用「エレベーター」装置ヲ新設ス

格納能力左ノ如シ

前部機雷庫 五號機雷 四十六個

後部機雷庫 同 三十四個

右ノ外「ランチ」及「ピンネース」ヲ機雷揚收用トシテ内火艇ニ改造ス

(三) 敷設指揮及通信装置

(1) 前艦橋及後甲板ニ機雷敷設指揮所ヲ新設ス

(2) 通信装置ハ敷設命令器、高聲電話器、傳聲管ヲ用フ

二、爾後ノ改造新設要領

大正十五年九月三日官房機密第八三五號ニ依ル敷設裝置改造ハ大正十五年十一月之ヲ實施ス左記ノ如シ

一一〇

- (イ) 鎖輪ノ新設
 - (ロ) 機雷庫緊止裝置改造
 - (ハ) 落下機切欠部ノ改造
 - (ニ) 機雷用昇降機一部ノ改造
 - (ホ) 原動機回轉計裝備
 - (ヘ) 機雷落下敷指示器ノ改造
 - (ト) 落下軌道後端ニ鎖輪新設
- 因ニ本艦ハ當初全機雷ノ連續敷設不可能ナリシガ本改造ニ依リ之ヲ完成シ敷設能力ヲ最大ナラシメ得タリ
昭和二年八月機雷爆發ニ依リ局部的損傷ヲ生シ同年ヨリ翌三年ニ亙リ之ガ復舊ニ任ジ尙左記小改造ヲ實施セリ
- (イ) 前後昇降機ニ通ズル支軌道中央部ノ保持軌道ヲ除ク(六號機雷ノ移動ノ爲)
 - (ロ) 前後昇降機ニ六號機雷ヲ搭載ノ爲外側ノ一部ヲ切缺ク

二、殿

鳥 (昭和三年二月起
昭和四年十二月竣工)

一、機雷敷設裝置

- (一) 機雷敷設軌道ハ下甲板兩舷ニ設ケラレタル各三條ノ溝渠内ニ設ケ五號機雷用及其ノ他ノ機雷ニ依リ溝渠ノ兩側ニ特製網ヲ設ク
- (二) 敷設電動機及整動機共ノ他敷設通信裝置一切ヲ裝備ス
- (三) 敷設原動傳動裝置

- (イ) 機雷敷設ハ機動ニシテ全機雷ヲ連續敷設シ得ルヲ立前トシ片舷逐次、兩舷交互、各軌道獨立何レノ敷設ヲモ爲シ得ル如クシ共ノ變換ハ確實容易ナルヲ要ス
- (ロ) 敷設原動機トシテ五十馬力並ニ三十五馬力電動機及二十五番型整動機ヲ裝備シ整動機ヨリ減速裝置ヲ經テ主軸ヲ回轉セシム
- (ハ) 原動機ノ回轉調節及敷設原變更嵌脫裝置ハ總テ敷設指揮所ニ於テ爲スヲ立前トシ要スレバ原動機室ニテモ行ヒ得
- (ニ) 機雷裝備場所及昇降機
 - (イ) 裝備場所ハ上甲板ヲ之ニ充テ兩舷各一條ノ軌道ヲ敷設シ回轉盤及昇降機ヲ以テ下甲板敷設軌道ト連絡ス
 - (ロ) 昇降機ハ前後二個所ニ設ケ重量二、五噸ニ堪ヘ容積ハ六號機雷(繫維器共)一個及兵員一名ヲ搭載シ得ル如クス
 - (ハ) 昇降機ノ上下(速度毎分二〇米)ハ電動機ニ依リ制動裝置安全裝置ヲモ完全ナラシム
- (ホ) 機雷取入及揚收裝置(略)
- 二、敷設指揮所及指揮塔
 - (一) 機雷敷設指揮所ハ設計書及附圖(略)ニ依リ設置シ一切ノ通信裝置ヲ裝備シ艦橋及電動機室トノ通信ノ外電動機ノ發停及調速、敷設舷變更嵌脫等一切ヲ爲シ得ル如クス
 - (二) 指揮塔ハ後方ノ展望ヲ擴ゲ且落下機雷ノ監視ニ十分ナル舷窓ヲ取附ク
- 三、搭載機雷ノ種類數量

機雷別	五號機雷ノ場合	六號機雷一、二型ノ場合	一般機雷ノ場合	六號機雷三型ノ場合
數量	五〇〇	二四〇	四〇〇	三〇〇

四、防雷具曳航裝置(略)
六、爆雷兵裝

(一) 上甲板後部兩舷ニ爆雷水壓投下臺各一臺及爆雷投下軌條各一條ヲ設ク

(二) 爆雷投下軌條ハ各條滑走臺ニ搭載セル爆雷八個宛ヲ搭載シ得ル如クシ各完全ナル緊止裝置ヲ施シ波浪ニ對シ絕對安全ナラシム

七、主要裝備要目ヲ示セバ左ノ如シ

(一) 機雷敷設裝置 一式

敷設軌道六條(下、中甲板)、敷設電動機(五十馬力一)、敷設盤整動機(常補用各一組)、敷設電動操縱裝置一式、機雷落下

機六、機雷落下艇六、機雷導出索二、電送輪六

(二) 機雷緊止裝置 一式

(三) 機雷裝備軌道 二條

(四) 其ノ他

軌道回轉盤 六、機雷運搬車八、機雷昇降機二、同上用電動機(十五馬力)二、機雷收入電動機(十馬力)三、機雷揚取電動機(十五馬力)

一、機雷落下敷指示器六組、機雷敷設原動機回轉計三、機雷敷設時計(大)二、鋼索捲戻裝置二、爆雷水壓投下裝置二、爆雷手動投下裝置一式、爆雷緊止裝置、防雷具一組(展開器、曳索接、纜器、提收器等)、同展開器格納運搬裝置二組

終ニ附記スベキハ機雷敷設艦ノ一種トシテ機雷敷設潜水艦ヲ擧ゲザルベカラザルコト之ナリ此種潜水艦ハ大正初頭已ニ露國及佛國ニ於テ之ヲ有セシガ如キモ實用ニ供セラレシハ獨逸ノU、C艇ニシテ大正三年十月之ガ建造ニ着手シ翌四年已ニ活動ヲ開始セシニ始マル我國ニ於テハ大正九年度始メテ之ヲ計畫シ大正十四年進水ス伊號二十一級即チ之ナリ(參考圖表參照)